

# 古英詩 *Andreas* における関係詞節の 格決定について

井 田 琇 穂

## 1

既に筆者は、「古英詩 *Andreas* における関係代名詞」という論文を公にした。<sup>1</sup> その論文で古英語の関係詞節の格決定 (case assignment) を扱わなかったので本稿で扱いたい。本稿は前稿で考察しなかった H. H. Hock (1986, 1988, 1991) を特に扱い、前稿の不十分な点を補う続編である。

周知のように古英語には関係代名詞の働きをするものとして不変化詞 *þe*, 指示代名詞 *se*, 指示代名詞 *se* と不変化詞 *þe* との組み合わせと 3 種類あった。格決定が問題となるのは *se* が格変化をする二番目と三番目の *se*, “*se þe*” の場合である。その場合、古英語特有の問題として、格決定をするのが主節か従属節かのどちらであるかということがある。本稿はこの問題を扱う。

## 2

まず古英語の関係詞節の特徴についての H. H. Hock の所説を考察したい。彼はゲルマン語における関係詞の歴史的な生成と発展とを考察しているが、彼の説は初め圧縮された形で1986年の著書の中で発表された (1986: pp. 341-344)。その後、1988年、1991年と少しずつ内容を発展させてきたものである。以下、彼の説をまとめる。

古英語における関係詞節と、その関係詞節の置かれる主節との関係は次の通りである。

- (1) [ (CP) ]<sub>MC</sub> [ (RM) ]<sub>RC</sub>  
 CP : Correlative Pronoun (or Adjective)  
 RM : Relative Marker  
 MC : Main Clause  
 RC : Relative Clause

*Andreas* 799:<sup>2</sup>

....

hwær se wealdend wære þe þæt weorc staðolade.  
 where that Ruler was who that work established  
 (Bradley: where the Ruler was, who established that work.)

この例で *þe* は *se* と相関関係にあることが自明である。即ち、主節の中の「相関指示形容詞＋名詞」の後に関係詞節が従属節として続く。関係詞節には、その節の頭に関係詞——古英語では不変化詞 *þe*——が来る。ここで Hock は不変化詞 *þe* が来る形を、他の形より古いと考えている。このことは彼の説の要になっている。

次の段階として、この相関指示詞が、その修飾する名詞を離れて関係詞である不変化詞 *þe* の直前に置かれる。この相関指示詞が直示的に (deictically [(発話行為依存的) 直示的]) に後続の関係詞節に言及すると Hock は考える (1988: p.43, 1991: p.72)。<sup>3</sup> この段階では相関指示詞の格は主節によって決定される。しかし、この相関指示詞が次第に関係詞節の内部が要求する格を取ることになる。即ち、指示詞の格が従属節に支配されるようになる。相関指示詞は主節の支配から離れて、「相関指示詞＋関係詞 *þe*」とが一つの関係詞のまとまりとして扱われるようになる。次のような構造になる。

- (2) [ ]<sub>MC</sub> [ (RP)RM ]<sub>RC</sub>  
 RP : Relative Pronoun

a. *Andreas* 979-980:

..., þær is ar gelang  
 where is grace [to be held]

fira gehwylcum, þam þe hie findan kann.  
 [of men] [by any] [by that (person)] who it find can  
 (Bradley: ..., [to that pure home] where grace is to be held by any man who can find it.)

b. *Andreas* 565b-568a:

Synnige ne mihton  
 Sinners not could  
 oncnawan þæt cynebearn, se ðe acenned wearð  
 recognize that [royal child] he who born was  
 to hleo ond to hroðre hæleða cynne,  
 for protection and for solace [of men] [to kind]  
 eallum eorðwarum.  
 [to all] [to inhabitants of the earth]  
 (Bardley: They could not recognize, the sinners, that royal child who was born to mankind, to all earth's inhabitants, for their protection and solace.)

a の例では先行詞が与格 (gehwylcum) で、それに合わせて指示代名詞を与格 (þam) にしている (þe の中での関係詞の格は主格である)。この場合、指示詞の格を主節が決定している。b の例では指示詞の格を関係詞節が決定している。1. 566の cynebearn は中性名詞単数対格形であり、関形詞 ðe の直前の se は主格である (しかしこの例は先行詞に指示詞が付与されている例である。この指示詞については本論の後の部分の se の 11. 751-752 [se の対格] の解説で扱う)。主節ではなく関係詞節が相関指示詞の格を決定するようになった時点で、CP が RP として扱われるようになったと言える。<sup>4</sup> 関係詞 þe の直前に指示詞が置かれるようになった段階で、指示詞の格を主節が決定する初期の段階と、従属節が決定する次の段階と二つの段階を Hock は考えている。<sup>5</sup> CP の格を従属節が決定する段階は現代英語の型と原理上、近いのである。

## 3

以上の Hock の所説と前稿(1993: pp.67-68)で考察した E. Prokosch(1938)のゴート語での関係詞構造の発達についての所説との整合性について次に述べる。前稿で引用した部分を再度、参照のために引用したい。

- (3) a sa manna, ei qap þata "the man who said that"  
 b sa manna, ei [ik] gasah "the man I saw"  
 c sa manna, þan(a)-ei gasah "the man I saw"  
 d sa manna, sa, ei gasah "the man I saw"

(3)bでは関係詞節(ei節)の中の主語(ik)が省略されeiの格が不明である(主語省略の現象は多いとのことである)。eiがgasahの主語とも考えられる(即ち, "the man who saw"の意味にもなる)ためeiが関係詞節の中で目的格であることを明示するため(3)cのようにeiの直前に指示代名詞の単数男性対格形あるþan(a)を補っている。これと同時に主節の"sa manna"の主格に引かれてeiの直前に指示詞の主格(上記の場合はsa)が来ることがある([3]d)。

以上のように関係詞節が関係詞eiの直前の指示詞の格を決定する場合を、Prokoschは発生的に古い段階と考えている。それゆえに主節が関係詞eiの直前の指示詞の格を決定する場合を新しい段階と見るのである。彼はゴート語での関係詞構造を基にしてこのような考えに達した。

Hockの説はこのProkoschの考えと反対である。Hockは関係詞の直前の指示詞の格を主節が決定するのが古い型と考えていた。Hockは初期古英語と古ノルド語(Old Norse)に基礎を置いて彼の説を立てた。彼によると後期古英語とゴート語とが並行して同じ特徴(関係詞節が関係詞の直前の格を決定する)を示しているとのことである(1991: p.76)。

本稿ではこの説の違いに決着をつけない。今後、ゴート語と古ノルド語についての筆者の研究がある程度、進んだ段階で改めてこの問題を扱いたい。

以下の論では暫定的に Hock に従い古英詞 *Andreas* を資料として関係詞節における格の決定の問題を検討する。このことを検討する場合、指示詞 *se* が単独で関係詞の役割をする場合と「指示詞 *se* + 関係詞 *þe*」の組み合わせが関係詞の役割をする場合とで違いがあるかどうかを考える。

## 4

*se* の場合から考える。最初に *se* 自体の格が主格の場合である。以下、関係詞節内が要求する格、主節が要求する格と *se* 自体の取っている格との三者の組み合わせを検討する（このことは *se*, “*se þe*” の *se* の格の考察のそれぞれの場合にも当てはまるのでこれ以後で繰り返さない）。

(4)

se の格	RC の要求する格	MC の要求する格	行
主格 (10)	主格(10)	主格(6)	11b-14, 1199-1200, 1376-1378, 1443b- 1445, 1540b- 1542a, 1602-1605a
		対格(4)	33-39, 1103b- 1106, 1197-1198, 1293-1295

RC : Relative Clause

MC : Main Clause

行 : *Andreas* の行数

( ) 内は用例数

*se* の先行詞が主節の中で対格であるが、関係詞節が要求する格である主格を *se* が取っている例が 4 例ある。この 4 例では関係詞節が *se* の格を決定している。主節、関係詞節共に主格を要求し、*se* が主格の場合は *se* の格をどちらの節が決定しているかの判断はできない。<sup>6</sup>

se の中に節の一部である先行詞を含む（現代英語では機能上、先行詞を含む what に近い）例は11. 1293-1295（主節が対格を要求する場合）、1443b-1445（主節が主格を要求する場合）である。特に11. 1443b-1445は se の中に先行詞を含みながら関係詞節全体が主節の主語になっている。更にこの関係詞節は文中、主節の後部位置にきている。主節の主語であるが文頭ではなく主節の後部位置を占めるのが初期古英語の統語法の特徴である。現代英語ではこの関係詞節が文頭にくるのが普通の語法である。

(5) *Andreas* 1443b-1445:

No þe laðes ma  
 Not you [of hurt] more  
 þurh daroða gedrep gedon motan,  
 by [of spears] shock do [be able to]  
 þa þe heardra mæst hearma gefremedan.  
 [those who] you cruel most [of injuries] perpetrated  
 (Bradley: They will not be allowed to do you any more hurt by the  
 shock of their spears, who have perpetrated the most cruel injuries  
 upon you.)<sup>7</sup>

se が関係詞節の中で主格である場合(se に先行詞を含む場合を除く), se に対する解釈が二種類あるように思われる。一つはこの se は本来の指示代名詞の機能を持っている可能性がある。次例を参照して欲しい。

(6) *Andreas* 1199-1200:

Ðæt is Andreas, se me on fliteð  
 That is Andrew who me with quarrel  
 wordum wrætlicum for wera manigo.  
 [in words] [artfully contrived] before [of men] multitude  
 (Bradley: This is Andrew who is quarrelling with me in artfully  
 contrived words, before this multitude of men.)

この場合 *se* が関係詞ではなく文が *Andreas* で終止し“that (man)”の意味で *se* が *fliteð* の主語になっているとも解釈できる。

二つ目は次の図のように考えられる。

$$\begin{array}{l}
 (7) \quad [ \quad (CP) \quad ]_{MC} [ \quad (RM) \quad ]_{RC} \\
 \longrightarrow [ \quad \quad ]_{MC} [ \quad (CP) (RM) \quad ]_{RC} \\
 \longrightarrow [ \quad \quad ]_{MC} [ \quad (RM) \quad ]_{RC}
 \end{array}$$

第一段階として主節の中の相関指示詞が関係詞節の中に移動し次の段階で関係詞である不変化詞 *þe* が省略され本来、指示詞であった *se* が関係詞の機能を果たすようになって考えられる。*se* (更に“*se þe*”) の場合、先行詞に指示詞が伴うことが少ないことの原因として上記の相関指示詞の関係詞節への移動を挙げることができるかもしれない。*se* が主格の上記の場合、先行詞に指示詞が付いている例は一例もない。この考えが Hock の説である。

次に *se* が対格の場合を見る。

(8)

se の格	RC の要求する格	MC の要求する格	行
主格 (10)	対格(10)	主格(2)	751-752, 1173-1176
		対格(7)	70-75, 344-348, 603-609a, 624-627, 814b-817, 1481b- 1483a, 1623-1624
		属格(1)	483b-488

*se* が対格の時主節と関係詞節との両方が対格を要求する場合この *se* の格を両方の節の内どちらの節が決定するのか明確な判断はできない。この例は10例の内7例と多い。このことは上記の *se* が主格の時にも当てはまった。

主節の中で関係詞節の先行詞が主格, 又は属格になっているので主節が *se* の格を決定するとしたら *se* は主格, 又は属格になるはずである。しかし実際は関係詞節の要求する対格になっている例が 3 例ある。この場合 *se* の格は従属節が決定するのである。3 例の内, 1 例を引用する。

(9) *Andreas* 751-752:

þis is ilca ealwalda god

This is the same all-ruling god

ðone on fyrndagum fæderas cuðon.

whom in [days of old] patriarchs knew

(Bradley: This is the same all-ruling God whom the patriarchs knew in days of old; ....)

この例のように従属節が対格を要求し *se* が対格である場合, *se* が主格の場合とは違って(これについては上述した), この対格の *se* を指示詞とは解釈できない。と言うのは普通の語順では独立した文の冒頭に指示詞の対格が語順の比較的, 自由な古英語でも来ないからである。引用箇所は上記の 9 例の中で 1 例だけ先行詞に指示詞が付属している例である (*Andreas* の “*se þe*” で先行詞に指示詞が付属するのは 2 例だけである)。先行詞に付属する指示詞を Hock は後位置に移動した指示詞 (これは関係詞としての機能を果たすようになっているが) の複写 (copying) か, 又は定冠詞機能をもつ語と二通りに解釈する (1988: p.43)。多分この先行詞に付随する指示詞は *ilca* と呼応して用いられ(この意味では定冠詞の機能を持つ), 更に後続の関係詞と相関関係にあると考えられる (本来の指示詞が関係詞に変わりその関係詞とこの指示詞は新たに相関関係の機能を持つ)。

上記の例の中で *se* の中に先行詞を含むのは 11. 70-75, 344-348, 1481b-1483a の 3 例である (主節, 関係詞節共に対格を要求する場合である)。3 例とも現代英語では *what* (先行詞を含む関係詞) に当たる例である。

*se* が属格と与格の場合は次の通りである。

(10)

se の格	RC の要求する格	MC の要求する格	行
属格 (3)	対格(1)	属格(1)	143-146
	属格(2)	属格(1)	1498-1502
		対格(1)	1053b-1057
与格(1)	与格(1)	主格(1)	1322-1323

se が属格の場合、3 例の内、1 例ずつ主節が決定する場合 (11. 143-146) と、関係詞節が決定する場合 (11. 1053b-1057) とがある。1 例 (11. 1498-1502) は主節、従属節共に属格を要求するためどちらの節が格を決定しているか判断ができない。se が与格の場合は関係詞節が格を決定している。se の例では主節が格を決定する例は *Andreas* では 11. 143-146 (se が属格の例) 1 例だけである。この場合 se に先行詞を含んでいる。

(11) *Andreas* 143-146:

Hie ða gemetton modes glawne,  
 They then found [of mind] wise  
 haligne hæle, under heolstorlocan  
 holy hero in confine  
 bidan beadurofne þæs him beorht cyning,  
 wait battle-honoured [for what] him sublime king  
 engla ordfruma, unnan wolde.  
 [of angels] creator grant [willed to]

(Bradley: So they found the wise-minded holy hero, the battle-honoured man, in his dark confine, waiting for what the sublime King, the creator of the angels, willed to grant him.)

この引用部分では se は属格の形で先行詞を含み bidan の目的語になってい

る。

se が与格の例は現代英語の感覚では特異な例である。この場合も se に先行詞が含まれる。

(12) *Andreas* 1322-1323:

Cyneprym ahof, þam wæs Crist nama,  
 [kingly majesty] vaunted [to that to whom] was Christ name  
 ofer middangeard, þynden hit meahte swa.  
 on earth while it [was able to] so  
 (Bradley: He whose name on earth was Christ vaunted his kingly  
 majesty — while he was able to do so.)

この þam は先行詞を含み格は関係詞節が要求する与格である。“þam wæs Crist name” (直訳すると “to that [person] to whome the name was Christ” となる) が ahof の主語になっている。現代英語では主語には主格 (Bradley の訳のように “He whose...”) がくるのが普通なので上例は特異である。

(13) *Andreas* 1498-1502:

Geher ðu, marmanstan, meotudes rædum,  
 Listen you marble [of Arbiter] [to ordinances]  
 fore þæs onsyne ealle gesceafte  
 before whose face all creatures  
 forhte geweorðað, þonne ....  
 fearful grow when  
 (Bradley: Listen, marble, to the ordinances of the Arbiter before  
 whose face all creatures will grow fearful when....)

この場合 rædum (1. 1498) で文が終止し, þæs は指示詞としても解釈できる。関係詞 se を指示詞とも解釈できるのは se が主格の場合と一部, 属格の場合である。関係詞 se の特徴についてのまとめは “se þe” との対照で後に扱う。

## 5

“se pe”の se が主格の場合を次に考える。

(14)

se(“se pe”)の格	RCの要求する格	MCの要求する格	行
主格(7)	主格(7)	主格(5)	129-133, 279- 283, 520b- 525, 533b- 536, 1368b- 1371
		対格(1)	565b-568a
		与格(1)	577-581

主節，関係詞節の両方の節が共に主格を要求する上記5例の場合はse(“se pe”)の中のse)の格の決定をどちらの節が行っているか判断ができない。残り2例(11. 565b-568a, 577-581)はseの格を従属節が決定している。その内の1例11. 565b-568aは既に(2)bで引用した。

次に se (“se pe”)の中の se) が与格，属格，対格の場合である。

(15)

se(“se pe”)の格	RCの要求する格	MCの要求する格	行
与格(3)	主格(3)	与格(3)	636b-640, 907b-909, 977-980
属格(2)	主格(2)	属格(2)	25b-28, 1150b-1153a
対格(1)	主格(1)	対格(1)	746b-750

この場合，関係詞節は全て主格を要求するが，以上6例は主節が se(“se pe”

の中の *se*) の格を決定している。しかし、*se* (“*se þe*”の中の *se*) が主格の場合では関係詞節が主格を要求し主節が対格、又は与格を要求する上記と同じ条件でも *se* の格は主格であった。即ち、“*se þe*”の格の決定では主節と関係詞節と両方とが決定するのが混在している。

*se* と “*se þe*” との場合の *se* を主節 (MC) か関係詞節 (RC) かのどちらの節が支配しているか、ここでまとめてみたい。以下において示されている格は *se* が取っている格のことである。各々の場合どちらの節が支配しているか判断できない場合がある (これについては上述した)。

(16) *se* (23例)

RC 支配：9 例 (39%)

主格：4 例：33-39, 1103b-1106, 1197-1198, 1293-1295

対格：3 例：483b-488, 751-752, 1173-1176

属格：1 例：1053b-1057

与格：1 例：1322-1323

MC 支配：1 例 (4%)

属格：1 例：143-146

(17) *se þe* (13例)

MC 支配：6 例 (46%)

与格：3 例：636b-640, 907b-909, 977-980

属格：2 例：25b-28, 1150b-1153a

対格：1 例：746b-750

RC 支配：2 例 (15%)

主格：2 例：565b-568a, 577-581

*Andreas* を例にして次のようなことが言えそうである。不変化詞 *pe* 単独の場合 (29例)、関係詞節の要求する格は主格 (21例) と対格 (8例) しか現れない (拙論 1993 : p.70 参照)。更に“*se pe*”の場合も (これも *pe* を含む) 関係詞節が要求するのは主格 (13例) だけであった。しかし、*se* 単独の場合 (23例)、関係詞節の要求する格は少数だが属格 (2例) と与格 (1例) とがある。このことから判断して不変化詞の *pe* では十分に対応できない関係詞節の要求する格——主格、対格以外の格——を満足させるため *se* 単独 (不変化詞 *pe* ではなく) の関係詞が用いられるようになったのであろう。即ち、この現象は現代英語の格変化のある関係代名詞 (例えば *who*) に近づいていることを示していると思われる。*se* は *pe* とは違って語形を変えることができる。その反面この *se* には一般的に言って指示詞か関係詞かという曖昧な点が生じることも事実である。<sup>8</sup>

## 6

本論文は H. H. Hock のゲルマン系言語における関係詞構造についての仮説に基づいて古英詩 *Andreas* における関係詞の格決定を考えた。その結果として筆者自身が引き出した考察は次の点である。

(18) *se* 単独の場合は関係詞節が *se* の格を決定するのが39%と高く、主節が決定するのは4%である。“*se pe*”の場合 *se* の格を決定するのは主節が46%で、関係詞節が15%である。

(19) *se* 単独の場合、関係詞節の中で *se* が主格の時 *se* は指示代名詞として独立の文を作るような感じを与える。更に関係詞節の中での属格や与格という格にも *se* 単独 (*pe* なしの場合) では対応できる。*pe* という不変化詞では対応できない格に対して *se* 単独なら対応できるということである。

(20) *se*, “*se e*”共に先行詞に指示詞がくる例が少ないのでこの *se* は両方とも (“*se pe*”の *se* の場合も) 本来は Hock の主張するように先行詞に付随していた相関指示詞であった可能性がある。

以上のことは他の古英詞の分析と他のゲルマン語の考察とを通して更に今後、検討する必要がある。

(1993年7月20日)

#### 注

- 1 『同志社大学英語英文学研究』59号(1993年3月), pp.67-86.
- 2 *Andreas* は1,722行からなり、9世紀末に作られたようである。この詩は *Vercelli Book* に収められている。この時期の詩は全て、後期 West-Saxon 方言で書かれて現在に伝えられている。引用のテキストは、George Philip Krapp (ed., 1932) による。引用した詩に付けた現代英語訳は S. A. Bradley (1982) による。古英詩であればどの詩を対象としてもよいが、一例として *Andreas* を選んだ。原文の下に付した語句注釈について注意したいことは、原語一語に対して現代英語が二語以上にわたる時は、[ ] で表したことである。(1)(2)の用例は、前稿(1993)と重複することを一言、断っておく。
- 3 “deixis” ([発話行為依存的] 指示性) について John Lyons (1977: p.636) の定義を引用する。

The term “deixis”(which comes from a Greek word meaning “pointing” or “indicating”) is now used in linguistics to refer to the function of personal and demonstrative pronouns, of tense and of a variety of other grammatical and lexical features which relate utterances to the spatio-temporal co-ordinates of the act of utterances.

- 4 「指示詞 *se*+関係詞 *þe*」をどのように取り扱うか、学者間で意見が分かれることは E. C. Traugott が触れている (拙論1993: p.75参照)。Paul Kiparsky は関係詞 *þe* の直前の指示詞が関係詞の機能を持つのが本来の形だと考えるが、この説に Hock は反論している (1991: pp.67, 76)。更に Ken Safir は関係詞 *þe* の直前の指示詞は関係詞であって関係詞節の一部であるがその指示詞の格は主節が決定すると考えるが、この説をも Hock は退ける (1991: p.81)。
- 5 Hock は自説が Delbrück (1909), Johansen (1935) の説に基づいていると言う (1991: p.71)。Delbrück 他の学者の著書については Hock を参照のこと。
- 6 以下、*se* が対格、属格の時、“*se þe*”の主格の時にも当てはまるが、主節、関係詞節共に同じ格を要求し、*se* がその格を取る場合にこの *se* の格を関係詞節が決定していると仮定できるのではないかという反論がありうる。しかし筆者はこのような場合、格の

決定に関して主節、関係詞節と50%ずつの可能性があると考える。この点に関しては将来、再考したい。

- 7 Bradley のように主語に they を立て関係詞節を後に置く、即ち主語省略のように解釈する可能性があるが、筆者は se——ここでは *pa*——が先行詞を含み文全体の主語になっていると解釈する。
- 8 拙論 (1993: p.75) で紹介した A. Campbell の説を想起したい。即ち、se 単独では指示詞と受け取られるので se が関係詞であることを明示するために *pe* を付加するという説である。se 単独では指示詞とも関係詞とも解釈できる可能性があるということである。

### References

Text:

Krapp, George Philip.(ed.) *The Vercelli Book* ("Anglo-Saxon Poetic Records 2").  
New York: Columbia University Press, 1932.

Others:

Bradley, S. A. J. (trans.) *Anglo-Saxon Poetry*. London, Melbourne and Toronto: Dent, 1982.

Hock, Hans Henrich. *Principles of Historical Linguistics* ("Trends in Linguistics: Studies and Monographs 34"). Berlin, New York, and Amsterdam: Mouton de Gruyter, 1986.

Hock, H. H. "Relative clauses and rebracketing in Old English" E. H. Antonsen and H. H. Hock (eds.) *Germanic Linguistics II*. Indiana: Indiana University Linguistics Club, 1988.

Hock, H. H. "On the origin and development of relative clauses in early Germanic, with special emphasis on Beowulf" E. H. Antonsen and H. H. Hock (eds.) *Stæfcræft: Studies in Germanic Linguistics*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 1991.

井田琇穂. 「古英詩 *Andreas* における関係代名詞について」『同志社大学英語英文学研究』59 (1993) , pp.67-86.

Lyons, John. *Semantics*. 2 vols. London: Cambridge University Press, 1977

**Synopsis**

## Case Assignment in the Relative Clauses in *Andreas* (Old English Poem)

Hideho IDA

*Andreas* was composed at the end of the ninth century in the later West-Saxon dialect, consisting of 1,722 lines. Old English has three kinds of relative pronouns: "se" (originally the demonstrative pronoun), "þe" (the invariable particle), and the combination of "se" and "þe." When we consider the case assignment in the relative clauses, we need to think of the cases of the two relatives: "se" and "se þe." "Se" takes different cases in different environments.

First we will discuss in this paper which of the main clauses and the relative clauses determine the case of "se." Regarding the relative "se," it is the relative clauses that determine the case of "se" in thirty-nine per cent; the main clauses do so in four per cent. On the other hand, regarding the relative "se þe," the main clauses determine the case of "se" in forty-six per cent; the relative clauses do so in fifteen per cent. Thus what is clear is that with the relative "se," the relative clauses determine which case is used with "se." Whereas, with the relative "se þe," it is the main clauses that control the cases taken by "se" to a greater extent.

Next let us think of one characteristic of the relative "se." In the examined instances of "se" (twenty three examples), the relative clause requires the genitive case in two examples and the dative case in one example. But in instances of "þe" (twenty nine examples) the relative clause requires the nominative case (twenty one examples) or the accusa-

tive case (eight examples); in instances involving "se þe" (thirteen examples), the relative clause requires only the nominative case. In short only "se" standing alone can take the genitive and dative cases in its relative clauses, but the invariable particle "þe" cannot. It should also be noted that "se" is liable to be often interpreted as a demonstrative pronoun, not as a relative one. This is an important point when we consider the relative "se."

Last we will discuss the possible origin of "se" and "se þe." Of all the cases (thirty six examples) of "se" and "se þe," we can find only two examples in which the antecedents of the relative clauses have demonstratives; most of the antecedents do not have any demonstrative. As H. H. Hock pointed out, this may show us that "se" (including "se" of the relative "se þe") originates in correlative demonstratives accompanying the antecedents, which move to the position next to the invariable particle "þe" in some cases with the omission of the particle "þe." This paper considers these three points. (The writer would like to thank Professor D. Foreman-Takano for improving English expressions in this synopsis).